

支 払 又 は 支 払 の 受 領 に 関 す る 報 告 書
(銀行等又は資金移動業者を経由しない支払又は支払の受領)

報 告 年 月 日 : _____

財 務 大 臣 殿
(日本銀行経由)

		支払又は支払の受領の実行日			
1 報 告 者 氏 名 又 は 名 称 及び代表者の氏名 住 所 又 は 所 在 地 責 任 者 記 名 押 印 又 は 署 名 担当者の氏名 (電 話 番 号)				報告者の区分 (14) (該当分に○) 1. 銀行 2. その他金融機関 3. 一般政府 4. 中央銀行 5. その他 業種番号 (上記5のうち国際収支項目番号が記入要領3に該当する場合に記入) () (15~17)	
2 取引の相手方 (非居住者発行証券への投資に係る支払等にあつては証券の発行体) 氏名又は名称 (18~20) 所在国又は地域 業種番号 (国際収支項目番号が記入要領3に該当する場合に記入)					
支 払 又 は 支 払 の 受 領 の 目 的		受払の区分	金 額 (決済通貨により記入すること。)		日本銀行使用欄 (通貨)
(21~23) 国際収支項目番号: 支払又は支払の受領の目的:		(24) 支 払	(25~36)		(37~39)
		(40) 支払の受領	(41~52)		(53~55)
(56~58) 国際収支項目番号: 支払又は支払の受領の目的:		(59) 支 払	(60~71)		(72~74)
		(75) 支払の受領	(76~87)		(88~90)
(91~93) 国際収支項目番号: 支払又は支払の受領の目的:		(94) 支 払	(95~106)		(107~109)
		(110) 支払の受領	(111~122)		(123~125)
(126~128) 国際収支項目番号: 支払又は支払の受領の目的:		(129) 支 払	(130~141)		(142~144)
		(145) 支払の受領	(146~157)		(158~160)
					日本銀行使用欄 (国)
					(161~163)

- (記入要領) 1 西暦により記入すること。
2 「責任者記名押印又は署名」欄には、報告の提出について授権された者が記名押印又は署名すること。
3 業種番号については、本省令別表第3に定める業種番号を記入すること。ただし、報告者の業種番号については、支払又は支払の受領 (以下「支払等」という。) の目的が、国際収支項目番号512, 521, 531, 541, 568, 813, 817, 823, 911, 912, 915, 920に該当する場合に、取引の相手方の業種番号については、支払等の目的が、国際収支項目番号512, 521, 531, 541, 568, 811, 812, 815, 820, 913, 917, 923に該当する場合に記入すること。
4 取引の相手方は原取引 (支払等の原因となった取引をいう。) の相手方 (非居住者発行証券への投資に係る支払等にあつては証券の発行体) を記入すること。ただし、原取引の相手方を記入することが困難な場合は、支払等の相手方を記入して差し支えない。
5 「支払又は支払の受領の目的」欄には、本省令別表第1に定める国際収支項目番号及び支払等の目的を記入すること。なお、発行済株式等の売買に伴うものとして国際収支項目番号912にて報告する場合には、当該株式等の発行体の名称と業種番号についても記入すること。
6 記入欄が不足する場合には、本様式を用いて当該不足する欄のみを記入し次葉として報告すること。
7 債権債務の相殺による支払等 (現物による決済を含む。) についても報告を要する。この場合、相殺に係る債権及び債務の総額 (相殺戻として決済する部分を含む。) について本報告書により国際収支項目ごとに分類して報告し、相殺戻の支払等については国際収支項目番号を「491 (貸借記又は相殺の決済戻)」として支払等の報告を行うことができる。

- (注) 1 貨物の輸出入代金については、本報告の対象外である。
2 月末における海外預金の残高が、1億円相当額を超えるものについては、別途「海外預金の残高に関する報告書」の提出を要するので留意すること。

「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由しない支払又は支払の受領）」記入の手引（直近改訂時点：2016年3月）

1. 報告の対象と報告を要する者

（1）報告の対象と報告者（（2）に掲げる支払等に該当する場合を除く）

非居住者との間で「本邦にある銀行等又は資金移動業者を通じた為替取引」以外の方法により、支払又は支払の受領（以下「支払等」という）をした居住者。ただし、（2）に掲げる支払等に該当する場合は報告不要。

（注1）「支払の受領」とは、非居住者から取引の決済資金等を受取ることをいう。

（注2）「本邦にある銀行等又は資金移動業者を通じた為替取引による支払等」の場合には、本報告書ではなく、「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由する支払又は支払の受領）」（別紙様式第3又は第4）を提出すること。なお、「本邦にある銀行等又は資金移動業者を通じた為替取引による支払等」とは、本邦にある銀行等又は資金移動業者の為替を利用して、（1）居住者が外国送金する場合や外国からの送金を受領する場合、（2）居住者が本邦にある非居住者の預金口座に振込む場合や当該預金口座からの振込を受ける場合等が該当する。

（参考） 本報告書の対象（すなわち「銀行等又は資金移動業者を経由しない支払又は支払の受領」）となる決済方法の主要例は以下のとおり。

- イ. 債権債務の相殺（現物による決済も含む）
- ロ. 貸借記
- ハ. 海外預金口座を通じた受払
- ニ. 他の居住者を通じた受払
- ホ. 非居住者のために行う居住者による他の居住者への立替払い
- ヘ. 居住者のために行う非居住者による他の非居住者への立替払い
- ト. 現金・小切手等による直接決済

（2）報告が不要の場合（外為令第18条の4第1項、報告省令第1条）

イ. 1回の支払等の金額が3千万円相当額以下の場合

ただし、2.（2）に該当する外国における建設工事に関する資金の受払を海外預金で決済する場合は、報告の対象となる月中の支払額と支払の受領額との合計が1億円相当額以下であれば、報告は不要。なお、支払等の決済通貨が外貨の場合、3千万円相当額、1億円相当額を超えるか否かの判定は次のレートを使用して本邦通貨に換算した金額により行うこと。

- ・ 本邦通貨と外国通貨との売買を伴う場合：実勢外国為替相場
- ・ 本邦通貨の売買を伴わない場合（外国通貨同士の売買を含む）：基準外国為替相場・裁定外国為替相場（ただし、建設工事に関する海外預金については、実勢外国為替相場）。

（注）・ 1回の支払等は、決済資金の受払（1件毎）や相殺決済の都度計算する。従って、債権債務の相殺の場合は、個々の取引に係る債権債務の金額ではなく、取引代金を相殺決済した時点における相殺対象額（債権又は債務の総額のうちのいずれか少ない方の金額）に基づいて報告の要否を判断すること。

- ・ 例えば、4月中に取引のあった債権の総額6千万円（各1千万円×6取引）と

債務の総額 4 千万円（各 5 百万円×8 取引）とを 5 月 10 日に相殺する場合は、4 千万円が相殺対象額であり、相殺を実行した日（5 月 10 日）の翌月 6 月 20 日までに報告を行う必要がある。

- ロ. 貨物の輸出入代金（本邦の通関手続きを伴う貨物に限る。個人輸入を含む）
 - ・ 仲介貿易（三国間貿易）は、本邦において通関手続きを経ないため報告が必要。
 - ・ 貨物とは、「貴金属（ただし、プラチナ、パラジウム等は貨物に該当）、支払手段及び証券その他債権を化体する証書以外の動産」をいう（外為法第 6 条第 1 項第 15 号）。
- ハ. 非居住者に対する債務の決済のため、本邦にある銀行等又は資金移動業者を経由して海外預金口座に送金のうえ、当該口座を通じて 10 日以内に行った支払い。
 - ・ 当該支払の目的については、外国送金の際に「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由する支払又は支払の受領）」（別紙様式第 3 又は第 4）により報告すること。
- ニ. 非居住者に対する債権の決済のため、海外預金口座で非居住者からの入金を受け、10 日以内に当該口座から払出し、本邦にある銀行等又は資金移動業者を経由して行った支払の受領。
 - ・ 当該支払の受領の目的については、外国からの送金を受領した際に「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由する支払又は支払の受領）」（別紙様式第 3 又は第 4）で報告すること。
- ホ. 海外預金を通じた受払のうち、預金債権の発生・消滅に係る支払等。
- ヘ. イ. の但書、ハ. 、ニ. 、ホ. のほか、報告省令第 1 条第 2 項に規定する支払等。

2. 報告の根拠となる法令条文

- (1) 報告省令第 2 条第 1 項（（2）以外の場合）
- (2) 報告省令第 2 条第 3 項（外国における建設工事に関する資金の受払を海外預金で決済する場合）

3. 報告書の提出先と照会先

- (1) 提出先：東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
日本銀行国際局国際収支課国際収支統計グループ 60 番窓口
(郵送の場合の宛先：〒103-8660 日本郵便株式会社日本橋郵便局私書箱 30 号
日本銀行国際局国際収支課国際収支統計グループ)
- (2) 本報告書に関する照会先：外為法の報告書に関する照会先一覧を参照

4. 報告義務の発生時期と決済方法の関係

- (1) 1. に掲げる支払等を実行した都度（1 回毎）。なお、支払等の実行とは取引等ではなく、取引等に係る債権債務の決済をいう。従って、複数の取引をまとめて合計額で決済した場合は、これが 1 回の支払等の実行となる。逆に 1 件の取引代金を分割決済した場合は、個々の決済が

報告の対象となる。

(参考) 月中の支払等を集計して報告する「支払又は支払の受領に関する報告書(銀行等又は資金移動業者を経由しない支払又は支払の受領(取りまとめ分))」(別紙様式第 2)を使用することもできる。

(2) 本報告の対象となる支払等の決済手段と実行日の関係は以下のとおり。

- イ. 債権債務の相殺(現物による決済も含む): 相殺の実行日(取引日、支払請求日や差額の精算日ではない)
- ロ. 貸借記: 貸記又は借記の記帳をした日(差額の精算日ではない)
- ハ. 海外預金口座を通じた受払: 入出金のあった日
- ニ. 他の居住者を通じた受払: 他の居住者に支払等をした日
- ホ. 非居住者のために行う居住者による他の居住者への立替払い: 立替払いをした日
- ヘ. 居住者のために行う非居住者による他の非居住者への立替払い: 立替払いを受けた日
- ト. 現金・小切手等による直接決済: 現金・小切手の受渡日

5. 報告書の提出期限

(1) 2. (1) の場合: 支払等を実行した日の属する月の翌月20日まで。

—— 提出期限が休日(日本銀行の営業日以外の日をいう。以下同じ)の場合は、休日の前日まで。なお、郵送の場合は期限までに必着とする。

(2) 2. (2) の場合: 支払等を実行した日の属する月の終了後3か月以内。

—— 3か月目にあたる日が休日の場合は、休日の翌日まで。なお、郵送の場合は期限までに必着とする。

6. 提出部数

1 部

7. 報告書に記入する金額単位

支払等の金額を原通貨のままで記入すること。他の通貨に換算して報告することはできない。

8. 記入の方法と留意点

(1) 「報告年月日」欄

- イ. 西暦とすること(年月日の順に記入)。
- ロ. 日付は日本銀行国際局国際収支課国際収支統計グループに提出する日(郵送の場合は発送日)とすること。

(2) 「支払又は支払の受領の実行日」欄(「4. 報告義務の発生時期と決済方法の関係」を参照)

- イ. 支払等を実行した日を記入すること(年月日の順に記入)。
- ロ. 1回の支払等の実行の都度報告を要する。従って、同一の相手方と1日に複数回の支払等

を行った場合であっても、1回の支払等ごとに報告書を提出すること。

(3) 「報告者」欄

イ. 「氏名又は名称及び代表者の氏名」欄

支払等の当事者が報告者となる。代表者とは会社を代表する取締役等。氏名の冒頭に役職名（代表取締役社長等）も付記すること。押印は不要。

ロ. 「責任者記名押印又は署名」欄

(イ) 報告の提出について授権された責任者（報告者の内部規定に基づき選定）が記名押印又は署名すること。なお、責任者の選定にあたり肩書は問わない。

(ロ) 使用する印鑑は報告者の内部規定に基づき決定すること。

(ハ) 署名（自署）した場合は押印不要。

ハ. 「担当者の氏名（電話番号）」欄

(イ) 担当者は、本報告書に関する照会に対応できる者（複数でも可）を記入すること。

(ロ) 電話番号は可能な限り直通番号を記入すること。代表番号の場合は、内線番号・担当部署名を補記すること。

(4) 「報告者の区分」欄

イ. 1～5の番号部分を○で囲むこと。

ロ. 詳細は以下のとおり。

1. 銀行	業務として預金の受入又は為替取引を行うことができる次に掲げる金融機関が該当する。 ただし、信託業務を兼営するものについては、信託勘定における取引を「2. その他金融機関」に分類すること。 (1) 銀行（日本銀行を除く） (2) 協同組織金融機関 (3) 公的金融法人（国民経済計算における公的金融機関） (4) その他法律に基づいて設立される金融機関
2. その他金融機関	金融商品取引業者、生命保険会社、損害保険会社、投資信託委託会社、資産運用会社、信託業務を兼営する場合の信託勘定における取引、貸金業者、私的年金基金、資産の流動化に関する法律に基づき設立された特定目的会社等の特別目的会社及びその他法律に基づいて設立される業務として預金の受入又は為替取引を行わない金融機関（投資法人等）が該当する。
3. 一般政府	中央政府、地方政府、社会保障基金及び業務として預金の受入又は為替取引を行わない公的金融法人が該当する。
4. 中央銀行	日本銀行が該当する。
5. その他	上記1.～4. に該当しない者。例えば、一般事業法人、特殊法人や独立行政法人の一部、特定非営利活動法人、学校法人、宗教法人、個人が該当する。

- ハ. 報告者の「業種番号」については、報告者の区分が「5. その他」に該当し、かつ国際収支項目番号が512, 521, 531, 541, 568, 813, 817, 823, 911, 912, 915, 920に該当する支払等（「国際収支項目の内容」を参照）を含む場合、報告省令別表第3に定める業種番号（次表参照）を記入すること。報告者が複数の事業を営んでいる場合は、売上高が多い主たる事業の業種番号を記入し、報告者自身が持株会社にあたる場合は、再投資先の業種に該当する業種番号を記入のこと。ただし、再投資先の業種が明らかではない場合は、「その他製造業（業種番号290）」又は「その他非製造業（業種番号490）」を記入しても差し支えない。なお、「業種番号」が判らない場合は、「3. 報告書の提出先と照会先」に照会すること。

＜業種番号＞

(製 造 業)		180	一般機械器具	330	建設業
100	食料品	190	電気機械器具	340	運輸業
110	繊維	200	輸送機械器具	350	通信業
120	木材・パルプ	210	精密機械器具	360	卸売・小売業
130	化学・医薬	290	その他製造業	370	金融・保険業
140	石油	(非 製 造 業)		380	不動産業
150	ゴム・皮革	300	農・林業	390	サービス業
160	ガラス・土石	310	漁・水産業	490	その他非製造業
170	鉄・非鉄・金属	320	鉱業		

(5) 「取引の相手方」欄

- イ. 支払等の原因となった取引の相手方（以下「原取引の相手方」という）を記入すること。

(注) 「原取引の相手方」と「支払等の相手方」とは異なる場合があるが、本報告書には「原取引の相手方」を記入する。例えば、A社（米国）に対する貸付金を、A社の指示に基づいて第三者のB社（英国）に支払った場合でも、「取引の相手方」となる「原取引の相手方」はA社となり、「所在国又は地域」欄は「米国」とすること（目的は「非居住者への貸付」であるため、「国際収支項目番号」欄にはこれに該当する番号を記入）。

- ロ. 非居住者発行証券への投資に係る支払等にあつては、証券の発行体の名称及び所在国又は地域を記入すること。

- ハ. 「所在国又は地域」欄には国名又は地域名（例えば「米国」）のみを記入すること。法人の場合は所在する国又は地域（支店・営業所は支店等を設置している国又は地域）、また個人は住所（又は居所）のある国又は地域を記入すること。ただし、北朝鮮に本社のある支店等に対する支払の場合は、支店等を設置している国又は地域を記入した後に、「本社所在国は北朝鮮」と記入すること。

(注) 「所在国又は地域」は、銀行預金口座を開設している国又は地域とは必ずしも一致しない。例えば、本邦にある銀行等に開設している非居住者預金口座の場合、日本ではなく、その預金口座の名義人が所在する国又は地域を記入すること。「地域」とは、「アジア」や「欧州」等ではなく、「台湾」や「グアム」等、報告省令別表第2に掲載されている先をいう。

- ニ. 取引の相手方の「業種番号」については、国際収支項目番号が512, 521, 531, 541, 568, 811, 812, 815, 820, 913, 917, 923に該当する支払等を含む場合に記入すること（(4)ハ. を参照）。

複数の事業を営んでいる場合は、売上高が多い主たる事業の業種番号を記入し、持株会社への投資については、再投資先が明らかな場合は再投資先の業種を、再投資先が明らかな場合は報告者の業種に該当する業種番号を記入すること。ただし、再投資先の業種が明らかなのではなく、かつ報告者自身が持株会社にあたる場合は、「その他製造業（業種番号290）」又は「その他非製造業（業種番号490）」を記入しても差し支えない。なお、「業種番号」が判らない場合は、「3. 報告書の提出先と照会先」に照会すること。

(注) 利子・配当金等を第三者（例：常任代理人）から受領する場合は、「原取引の相手方」である証券の発行体の業種に該当する業種番号を記入すること。

(6) 「支払又は支払の受領の目的」「支払の区分」「金額」欄

イ. 「金額」は支払と支払の受領に区分して「国際収支項目番号」（「国際収支項目の内容」を参照）毎に、支払等を実行した原通貨のままで記入すること。通貨名は、通貨の特定が可能な表記とすること（例えば、「ドル」ではなく、「米国ドル」、「香港ドル」等と表記すること）。なお、通貨名は略号を使用しても構わないが、同様に通貨の特定が可能な形で表記すること（例えば、「ドル」については「\$」ではなく、「US \$」や「HK \$」等の表記とすること）。

(注1) 複数の取引をまとめて1回で決済した場合は、同一の「国際収支項目番号」毎に集計すること。

(注2) 報告対象となる1回の支払等について、該当する「国際収支項目番号」が2つ以上に分れる結果、1項目あたりの金額が3千万円相当額以下となる場合も、報告対象となるため必要事項を記入すること。

ロ. 「支払又は支払の受領の目的」欄には、「国際収支項目番号」を記入（「国際収支項目の内容」を参照）するとともに、支払等の目的を簡潔に併記すること（発行済株式等の売買に伴うものとして国際収支項目番号912にて報告する場合には、当該株式等の発行体の名称及び業種番号を記入すること）。

ハ. 「国際収支項目番号」は取引内容毎に決められている。ただし、該当する取引内容がない場合に限り1100（その他）の番号を使用できる。この場合、「支払又は支払の受領の目的」欄に記入する説明は「その他」ではなく具体的な取引内容を記入すること。なお、「国際収支項目番号」が判らない場合は、「3. 報告書の提出先と照会先」に照会すること。

ニ. 債権債務の相殺（現物による決済を含む）については、次の（イ）相殺対象となった債権債務部分のみを記入する方法、又は（ロ）債権債務の総額を記入する方法のいずれかを選択すること。

(例) 居住者（報告者）は非居住者（取引の相手方・米国）との間で次の債権（1億円）と債務（6千万円）を相殺し、差額（4千万円）を外国送金により本邦にある銀行で受領した。

- ・ 債権額 1 億円（電子部品の製造技術に係るロイヤリティ＜国際収支項目番号451＞8 千万円、仲介貿易に伴う商品売却代金＜同071＞2 千万円）
- ・ 債務額 6 千万円（新薬の研究開発に係る委託費＜同464＞5 千万円、米国から本邦に輸入した貨物代金＜報告対象外＞1 千万円）

- (イ) 相殺対象となった債権（ロイヤリティ 8 千万円のうち 6 千万円）・債務（6 千万円全額）部分のみを記入する方法。

支払又は支払の受領の目的	支払の区分	金額（決済通貨により記入すること）
451 電子部品の製造技術に係るロイヤリティ	支払	
	支払の受領	60,000,000円
464 新薬の研究開発に係る委託費	支払	50,000,000円
	支払の受領	

(注 1) 貨物の輸入代金 1 千万円の支払については、金額の多寡に関係なく本報告の対象外なので、記入しないこと。

(注 2) 差額 4 千万円の受取の報告は、「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由する支払又は支払の受領）」（別紙様式第 3 又は第 4）で報告すること。この場合、受領した 4 千万円に該当する目的は「電子部品の製造技術に係るロイヤリティの一部（2 千万円）と仲介貿易に伴う商品の売却代金（2 千万円）」であるため、「国際収支項目番号」欄には「451（知的財産権の使用料）2 千万円、071（仲介貿易の売買代金）2 千万円」を併記したうえ、当該番号に対応する金額をカッコ書きすること。

- (ロ) 債権（1 億円）・債務（6 千万円）の総額を記入する方法。

支払又は支払の受領の目的	支払の区分	金額（決済通貨により記入すること）
451 電子部品の製造技術に係るロイヤリティ	支払	
	支払の受領	80,000,000円
071 仲介貿易に伴う商品売却代金	支払	
	支払の受領	20,000,000円
464 新薬の研究開発に係る委託費	支払	50,000,000円
	支払の受領	

(注 1) 貨物の輸入代金 1 千万円の支払については、(イ) と同じ。

(注 2) 差額 4 千万円の受取の報告は、「支払又は支払の受領に関する報告書（銀行等又は資金移動業者を経由する支払又は支払の受領）」（別紙様式第 3 又は第 4）で報告すること。このケースでは、差額 4 千万円の取引内容は本報告書にて記入済みとなっているため「国際収支項目番号」は(イ)の場合とは異なり「491（相殺等の決済尻）」と記入すること。

ホ. 記入欄が不足する場合は、本様式を用いて別葉とすること。

(注) 本報告書については欄を追加・削除することはできないので留意のこと。

ヘ. 報告書が 2 枚以上となる場合は、必ず報告書の左肩をステープラ等でとめること。また、適宜の個所に連続番号を付記すること。

(参考) 連続番号の例（3 枚の場合）「1、2、3 止」「1／3、2／3、3／3」等

9. 報告書提出後の訂正方法

日本銀行（国際局国際収支課国際収支統計グループ）に連絡（「3. 報告書の提出先と照会先」を参照）し、その指示に従うこと。

そのうえで、以下の（1）訂正前と（2）訂正後の報告書計 2 部を提出すること。

- （1）提出済み（誤報告分）の報告書と同一内容の報告書（控えがある場合は控えのコピーでも可）を作成し、右上に「訂正前」と朱記したうえで、対象となる箇所（金額、国名等）の丸囲み及び訂正後内容を朱記すること。
- （2）正当分を新たに作成し、右上に「訂正後」と朱記したうえで、報告書の提出先（3.（1）参照）に上記（1）の報告書と同時（ステープラ等でとめること）に提出すること。正当分の「報告年月日」は再提出の日とすること。